
お嫁さんはお買い得？

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嫁さんはお買い得？

【Nコード】

N9756S

【作者名】

zens

【あらすじ】

二十数年の付き合いのある彼と彼女。完全無欠な彼女に対して彼はいつだって低空飛行でうだつが上がらない。そんな彼に彼女がある日、突然の提案をする。この提案は妥協、それとも――？

「君は、実にバカだな。滑稽だ、俗物だ」

時は変われども、彼女の僕に対する態度は変わることはなかった。生まれた病院も同じなら家も隣、保育園から大学までずっと同じというどちらかがストーリーカーとしかいえない関係が変わったのは大学を卒業してからのことだった。

当然のように誰も知る大手企業に入り、確かな存在感を発揮しているという彼女に対して、僕は就職さえできずにコンビニでアルバイトをする毎日だ。

「会ってすぐその言葉はきついぞ……」

「ああ、すまんすまん」

そう言う割には頭も下げないし、悪びれた様子もない。

彼女は昔からこうだった。

僕には頭も下げやしないし、態度も悪い。

そのくせ、回りにはいい顔するものだから性質が悪い。

「風霧、何か用事？　これからこっちはバイトなんだ」

休日がきちんと週二ある彼女と違ってこちらは働かない日が、そのまま生きるか死ぬかに直結する。

彼女と遊んでいる暇はあまりないのだけど……、毎週のように彼女は顔を見せに来る。

「うむ、それは知っている。しかし、私はとても魅力的な提案を持って来たんだ。現物はないのだけどね」

「風霧……君は保険会社の営業じゃないだろう」

「くっくくっ、保険なんかよりもよっぽどいいものだぞ」

「……だから、これからバイトなんだって」

午後一時から十一時までが今日のシフトである。

家から徒歩五分と近いバイト先だが、彼女と話しているせいで後十分ほどしか時間がない。

「元氣そうな顔が見られて嬉しいけど、今日は忙しいんだ。また今度な」

靴を履いて急いで玄関から外へと駆けだす。

今日もよく晴れているが、太陽は眩しくはない。

「風霧 伊那歩は今日はここで待たせてもらおう。明日は日曜日だ」
「本当に気持ちを逆なでするのが好きだな」

わざわざ名前まで名乗ることないだろうに。

扉を後ろ手に閉めてそれ以上の声をシャットダウンすると、時計をちらっと見る。

余裕はない。

けれども、旧友の元氣そうな姿を見られたことは決して悪い気はしなかった。

「ただいまー」

十一時も過ぎて家に帰る頃には僕はすっかりくたばっていた。

変な客にクレームつけられるわ、違った商品が来るわ……………最悪だった。

ふと、下に視線を向けるとまだ彼女の靴が残っている。

まだ、最悪な一日は終わっていないらしい。

「ようやくの帰りか。お勤め御苦労さま」

廊下の奥から風霧が顔を出しているのだ。

その後ろの方では、僕の両親が酒を飲んで笑う声がある。

「話があるならリビングはよしてくれとありがたい」

「ふむ、君の言うことならそうしよう」

「……面倒だからここでいいよ」

立ち話ならそう長話をするかもしれないだろう。

彼女はその意図を汲み取ったのか、つかつかと廊下を歩いてこちらにやって来た。

「単刀直入に言おう。私は鷺羽に今の仕事をやめてほしいと考えている」

「いや、ちょっと待て。ニートはまずい」
生活保護とか貰えたら楽だろうけど、現実はその間に優しくはない。

たとえ職歴にならずとも金を自分で稼がないと、僕が仮にそんなものを貰ったら墮落して後ろ指差されて生活するダメな人になってしまう。

「……何故、仕事をやめないといけない？」

そもそも風霧に生き方まで指図されるいわれはない。

昔からこんな関係だったなと思うが、疲れているせいか鬱陶しさしか感じることはなかった。

「用件はそれだけ？ もう――」

「最後まで話は聞くものだ。私は、鷺羽。君に月収二十万円の仕事を紹介したいと思っている」

……二十万円？

現金と言われようとその言葉に僕は悲しいくらいに素直に反応していた。

「……ちょっと待て。冷静に考えさせてくれ」

今の月収はどんなに頑張っても十五万が限界。

しかも流動的なものだ。話の内容にもよるが、乗っかってもいいのではないだろうか。

「どういう仕事なんだ？」

「雇い主は私だ」

「独立でもするつもりか？」

「いや、まさか。私はまだまだ未熟だ。もっと勉強する」

それなら一体何の仕事なのか？ ご両親？

いや、彼女の両親は別段変わった人ではなく、ごく普通のサラリーマンと専業主婦でしかない。

ただ、二人は温厚で優しく、僕もよくお世話になった素敵な方々

であり、将来の理想と思っていた人達だ。

あえて欠点を言うならば、子供にはきちんと相手のことも尊重できるようにしたい。

「……それじゃあ、どうしてさっきの話を持ち込んで来たのさ？」

理想の瑕疵といってもいい彼女ではあるが、からかっている様子も見えないし……ということでは僕は彼女の真意が知りたくなった。

話を促すと彼女にしては珍しく言い淀む態度を見せたが、それも一秒ほどのことだった。

「実は結婚しようと思うんだ」

「け、結婚？　ん、ああ、おめでどうさん」

「驚かないのだな君は？　今回の最大のサプライズというのに。興が削がれてしまった」

そんな勝手なことを言われても困る。

お祝いする気持ちが足りないことを見抜いたのだろうか。

「……おめでどう」

「……。実は祝う気がないだろ、君」

墓穴だったかな。

余計なことを言って自らばらしてしまった。

「君が嫉妬する気持ちも分からないでもない」

「やっぱ結婚してくれてよかった」

「っ！？　君のことはよく知っているつもりだったんだが……」

よく分からないが、風霧も墓穴を掘ったようだ。

しかし、同じように墓穴を掘っても僕と彼女では決定的な違いがある。

「何言ってるのこの子は……。伊那歩さん、ごめんなさいね。こんなダメな子だけど、貰ってくれる？」

「子売り飛ばす気か！？」

「何言っているの？　一銭も貰わないんだから……無償譲渡よ」

それは彼女には必ずフォローが入り、僕にはそれが無いということだ。

風霧が戻ってくるのが遅いと思った両親がわざわざ敵として話にいつの間にか参戦していた。

「馬鹿野郎。父さんがお前くらいの頃にはそれは立派に働いてお前を育てていたんだぞ」

……後者は母さん一人に任せていたって、いつも母さん嘆いていたんだが。

「何の生産性もない息子だけどよろしくお願いします」

「いえいえ、私が彼のことをきちんと幸せにしてみせます」

「……展開が早いよ!？」

酒を飲んでいるのは恐らく既に僕以外とは話の決着はついていたのだろう。

今ここで行われているのは、茶番、出来レース。

「……風呂に入って考えさせてくれない？」

「いいだろう。君の即断に感謝する」

いや、どうして決定事項のように話をするのだろうか。

逃げの一手も正直言って通用しそうになかった。

風呂から上がると両親は気を遣っているとばかりに撤収し、余所余所しく両親から案内された客間には僕と彼女だけが残された。

……客間に布団を二つ並べたのは誰だ？

「二人きりになったから、少し私のアピールをしようか。君にとってメリットも必要だろう」

やましいことを考えそうになるが、風霧はそんな素振りを一切見せることはない。

淡々としている。それが彼女のいい所であり悪い所でもある。

「それでも私は美人だと自負している。そのための努力も欠かしてはいない」

「うんうん、よく知っているともですよ」

「それも全ては涉、君のためなんだ」

「そのつけ足しはいらないと思うのです」

「……口調がおかしいぞ？　それはいいとして私はスタイルだって良いし、お金も君に不自由させないくらいにはある。……性格？　こんな良い女がどこにいる」

はいはい、いませんとも。

僕は諸手を挙げて彼女の主張を受け入れた。口喧嘩で勝てるほど彼女は弱くはない。

その代わりというわけではないが、満足そうに腕を組む彼女に僕は一つだけ疑問点を聞いてみることにした。

「風霧。大真面目に聞く。どこからどこまでが本気だ？　僕は君のことは信用しているが、僕の知る君はこんな冗談は言わないはずだ」
「ふむ。……君は目があるのかい？　感情はあるのかい？　私はいつだって君には本気で本当を見せてきたじゃないか」

「もし、そうなら猫を被っていてほしかったよ」
素直な気持ちというのも考えものである。

しばらく彼女と話をしていると、段々と僕は疲れて眠たくなってくるのが分かった。

彼女は一向に本当の理由は話してはくれず、まるでこちらを起こしているのが目的とさえ思えてしまう。

けれど、明日……というか今日もバイトのある僕としては午前二時近くになったこともあって早く寝てしまいたい。

「そろそろ寝たいんだ。悪いけど、これ以上の話の引き延ばしはやめてほしい」

そう切り出すと、彼女はやれやれとばかりに肩をすくめた。

「何と言うのかな。社会に出て数年経つが、そろそろ誰かに『おかえり』と言ってほしいと思うようになったんだ」

「……実家に帰ればいいのに」

「ハハッ、君は実にバカだな。私は両親に一人で何でもできると豪

語して家を出たんだ。今更、おめおめと帰ることなんてできない」
うちに来ている時点で大した変わりはないと思うんだけどな。
彼女は無駄に高いプライドが、実家に帰ることを許さないのだから。

「君だけなんだ。私の中で『おかえり』と言ってくれるのは……」

「とんだ妄想癖だね」

僕は彼女におかえりなんて言わないだろう。

仮に言っても、それは帰れという意味だ。

「まったく、君は素直じゃない。心の醜さは顔に出るぞ」

「……それは嘘だろうね」

皮肉が通じないのはいつものことだ。

僕が嘆息すると、彼女はふふっと高慢な笑みを浮かべた。

僕以外が見るとこの笑みは冷静な彼女の見せる温和なものに見えるのだそうだ。

そういう意味で彼女の言うことは嘘になる。

「……まあ、いいや。それで、どうして僕の所に？ 君の容姿なら

かなりの良い男が狙えると思うよ」

「むう……今の理由で信じてくれないのかい？」

「あれで信じたらなら、僕は君の言う俗物と同じだろうね」

「まったく、君という人は……。私はそんなことを言ったことはないぞ」

おい、最初に言っただろ……。

こうなったら追及してもしらばっくれるのが関の山。

無視して話を進めよう。脇道に逸れた話なんて今は必要ない。

「もう一度理由を聞くと。本当の理由は何？」

「君なら私のことを嫌々ながらも好きになってくれるだろう」

「君の言う『君』って奴は随分と心が広いんだね。お人好しすぎるよ」

これじゃ押し問答にしかないだろうね。

けれども、ここで引いてはいけないと僕の勘が告げている。

「君なら私一筋で愛してくれるだろう。私もそうできる」

「そりゃすごい自信家なこと。愛が重くて相手も大変だ」

「君との結婚生活は想像しやすいんだ」

「……それは妄想だって」

「ようやく君の話と認めたな」

「……チッ」

とはいえ、残念かな。

彼女には口喧嘩じゃ勝てっこないのだ。

押し負けた僕はただ押し黙るしかない。

しかし、残念かな。彼女は僕が黙ることを容認しない。

「私はお買い得だぞ？」

「フリーターで買えるお値段かね？」

「なーに、心配はないさ。払えないなら君の人生を担保にすればいい。分割払いも大歓迎だ」

「……お高いお買い物でして」

「否定はしない」

珍しいこともあるものだ、彼女は朗らかに笑みを浮かべた。

勝ち誇ったような顔も馬鹿にしたような顔もそこにはなかった。

そこには凜とした佇まいだけは崩さず確信を得ている彼女がいるのだ。

「まあ、書類は提出済みなんだがな」

「……」

「驚くほどに嬉しいか。うんうん、私も嬉しいぞ」

知らない間に契約が結ばれていただろ！？

真に恐ろしいのはそれを知らないのがきつと僕だけだということだ。

だから彼女は威風堂々と僕に相對していたのか。

「結婚詐欺じゃないの！？」

「失礼な。詐欺は相手に損させるだけだ。私の提案は損などないぞ」
さらに言うならば彼女は一片たりとも詐欺と思っていないことだ。

「黙って私について来い」

「黙らないよ、色々と問題が多いから！」

「断言する。これから先の人生、君にの前に私以上の女性が現れることはない。よって私を選ぶのが最善の選択なのだ」

「嫌な説得の仕方だ」

「どうするんだよ、これ……」

法的には今現在、風霧って配偶者だよな。

それはいい。

それよりもだ。

「今夜は初夜だな」

「うるさい」

この高慢ちきを今は黙らせたい。

「黙らせたかったらするべきことがあるだろう」

「……もう寝る」

「お、おい。ほ、本当に寝てしまうのか？ 据え膳はどうする気だ？」

僕はその言葉を無視して寝込むことを決め込んだ。

そうだ、黙らせられないならこっちが黙ってしまえばいいんだ。

「……そ、そんな。私は君好みのスタイルを自負しているというのに」

段々と彼女の声が遠くなる。

「……ったら………。するしか………。はず………」

ごそごそと何か物音はしたものの僕はそれを無視して眠りについてしまっていた。

しかし、翌日。

「昨晚は凄かったな」

この発言によって新たな僕と彼女の修羅場は始まることとなるこ

とをこの時の僕はまだ知る由もなかったのだった。

「知らない間に借金を負わされた気分だよ！」

「私は夫婦の営みで代金など取らないぞ」

お買い得商品には何か裏がある。

甘い話などあるわけがないのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9756s/>

お嫁さんはお買い得？

2011年5月4日18時55分発行